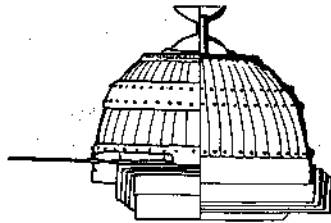


紀 要

第 4 号



1990. 12

財団法人 滋賀県文化財保護協会

11. 群雄割拠～その中の中国陶磁

清水 尚

誰が望むともなく、いつの間にか人間の及ばないところで設定された国家への運命の道を、古代より想像をも越える時空のなかで、砕き合いながら渾身として辿ってきた。そして、ひとつの大河が生まれる直前の臙々とした空気の向う側に国家としての日本の姿が隠しはじめた、そんな時代。その戦乱というべき殺伐とした生死の世界の中で、時にひとりの人間にもどるために、時には砕き合いの手段として、また日々の生活の親しみのある道具として、その身辺にあって運命をともにしたやきものの一群がある。

1. その時代

近江に新しい時代の幕明けの空気を漂わせながらも、戦乱の大きな暗雲が立ち籠めた永禄年間(1559-69)、あの織田信長が西へと動きはじめた。その動きは真に風雲急で、元龜年間(1570-72)には京への門たる近江の姿は一変していた。そして迎える天正4年(1576)、近江は国家形成の足掛りの地となる。伊勢湾と若狭湾を結ぶラインは、地形的に日本を二分する括れ部であり、平坦地を辿れば、必ず近江の地を通過する必要があるため、「近江を制するもの、天下を制する」といわれてきた。信長は安土にそれを実行したのである。その中で、潮流に沿いつつ、喘ぎながら展開し、消えていったふたつの城があった。

2. 小谷城と観音寺城

小谷城は長浜平野の北東界をなす小谷山の尾根上に構築されている。

大永5年(1525)、江南の雄、近江守護職六角定頼は江北で台頭してきた浅井氏討伐を企てた。それを伝える『宗滴話記』には、既に小谷城の存在が確認できる記事があり、その前年にあった浅見貞則打倒計画に際し、主家である京極高清、高延父子を迎えるために築城したのではないかと一般的には考えられている⁽¹⁾。そこから浅井氏3代の繁栄が展開された。しかし、朝倉氏との関係断ちがたく、同盟関係の信長に反期を翻し、再三の抗戦の後、天正元年(1573)浅井家は滅亡した。城はその後、羽柴秀吉が入城し、長浜への移城までの間、存続している。移城の時期は、天正9年(1581)以前と考えられるが、城下町は一部宿駅等として機能していたことが知られる⁽²⁾。

よって小谷城の大枠の存続期間は、大永4年(1524)前後から天正9年(1581)までと考えられ、更に城の立地が城下経営にあまりに不利であるがゆえに、落城後は清水谷屋敷が利用されていた可能性も強いことから、大永4年から天正元年前後まで約50年間としても大過ないものと推測され、検出遺物の大半はこの時期のものと考えられる。

次は観音寺城の存亡である。観音寺城は湖東平野に立つ独立峰、観音寺山の尾根上のかなり広範囲に構築されている。『寺院雑要抄』が伝える大永5年(1525)の留守居を後藤三郎左衛門に命じる記事は、「留守居」を必要とするだけの城郭としての体裁を整えていることを示すものと考えられ、観音寺山の麓に建つ近江風土記の丘資料館の秋田裕毅氏は、観音寺城の城郭としての整備時期について、「六角氏の勢力増大の契機となった文明3年(1471)の箕作城攻落から、長享元年(1487)の室町幕府による第1次六角氏征討までの間ではないか」と推測されている¹⁰⁾。

その後、幾度かの改修整備を実施していることが『馬場文書』などによって知られる。内、最も新しい時期の改修工事は弘治2年(1556)に実施されており¹¹⁾、観音寺城は中世城郭としてひとつの完成をみたといえよう。しかし、新しい時代の息吹きを前にして、それは何の力にもならなかった。永禄11年(1568)、京への道を迎える信長の通過を拒否したため攻撃され、これまでにはなかった圧倒的な力に対し交戦することもなく落城したのである。

よって現在検出される遺物の大半は、弘治2年(1556)から永禄11年(1568)の約12年間のもので占められている可能性が強いものと考えられよう。

3. 類型化の試み

昭和57年冬、深雪の中、初めて福井県一乗谷朝倉氏遺跡資料館を訪ねた。この時、知人の川村俊彦氏(現敦賀市教育委員会)より紹介された小野正敏氏(現国立歴史民族博物館助教授)は、既に貿易陶磁研究会の中心人物であり、輸入陶磁、殊に染付の分類、編年研究の第一人者として活躍されていた。小野氏曰く「これまでの一乗谷における出土遺物の詳細な検討で、文明年間(1420)から天正元年(1573)までの輸入陶磁器の組成は大略カバーできている。天正13年(1585)前後については和歌山根来寺の一群があるし、その間が一部わかっていないところがあるね。近江の城一小谷、観音寺、特に安土城(天正10年(1582)に落城)なんかの状況がわかると完成だね。」

滋賀県内の出土輸入陶磁について、その基礎データの集積すらない現状とその手段を知らない己を嫌悪しつつ、10年に近い歳月が過ぎてしまった。ここにきて、せめて基礎データだけでもとウロウロしているところ。このふたつの城郭についてもその一環で、これからインプットするわけだから、ここに掲出するデータは未熟なもので、全てを網羅しているとはいえない。しかし、近江における中近世土器の研究は日本中世土器研究会の方々によって進展目覚しく、その中の一組成を担う輸入陶磁についても僅かでも資料化されたものが必要とされており、敢えて出すことにした。安土城については、現在精力的に調査が進められており、近い将来のその出土遺物に関する詳細な報告を待ち、ここでは小谷、観音寺をとり上げ、また、中国陶磁の中でもよく内容のわかっている青磁、白磁、染付に焦点を絞ってみる。

分類方法については、これまでの貿易陶磁研究会の成果を超えるものは考えられず、基本的には全てこれに従って類型化を進めたが、一部今後県内の全輸入陶磁に関する基礎データ作成のために著者の理解し易い様に、また近江の実情等踏まえて改変した。

青磁については上田1982¹²⁾が基本となっている。碗についてはⅡ類は蓮弁文碗で、a-鍋(太宰府Ⅰ-5 b類)、b-鍋のない通常蓮弁(太宰府Ⅰ-5 a類)、c-丸型蓮弁(太宰府Ⅲ類)、d-

片切彫の細蓮弁、e—線刻蓮弁。III類は雷文帯碗で、a—口縁圈線、b—雷文帯と幅広蓮弁、c—略化雷文帯。IV類は無文碗で、a—端反りの胴張りタイプ(太宰府I—1類)、b—端反り、c—内弯、に分類した。皿についてはよくわかっていないので、形態の特徴によって、綾花—菊皿といわれるの、蓮弁—綾花と丸彫りの刻線で蓮弁様に表現するもの、多角—口縁を多角形にするもの、に分類。坏も同様で、外反—体部がツバ皿形に外反するもの、内弯—体部が内弯して立ちあがるもの(口縁には外反、直口の両者あり)に分類した。

白磁については小野1982⁹⁾を基本とした。碗についてはA—口禿、B—端反りの肉厚碗、C—端反りの肉薄碗、皿は、A—口禿、B—内弯の浅皿、C—端反り、D—綾花、E—輪花、F—内弯皿に分類した。坏は現状では分類が困難であるため、口縁部が残存しているものについては内弯か外反か、また輪花か綾花かで個体数を数えたため数量重複している。また、見込みの露胎圈についても別途に数えた。さらに灰色素地の多貫入白磁についても別途に数量を掲示した。

染付は小野1982・1985¹⁰⁾をそのまま使用した。坏については口縁の内弯、外反で分類している。

無論、この分類の中にはおさまらないバリエーションも観察される。類型化であるがゆえにその他としたが、殊に観音寺城に見る碁笥底の白磁皿や白磁多角坏など類例資料の増加が見込まれる一群もあり、また、同一分類の中にも更に小分類の可能性のあるもの(観音寺城における白磁皿C群の中には全く素地、釉調の異なる一群が観察されること、青磁碗II—e類中には内面体部に画花文をもつものがあること、染付碗E群VII B類中には文様パターンは確実にVII B類であるにもかかわらずマントーシン形をとらないものがあること、染付皿B群VIII類には碁笥底をもつタイプが少なくないことなどがあげられる)など今後検討しなければならない。

これを前提に、小谷城と観音寺城における出土中国陶磁を既述の方法によって分類し、その量を比較したのが掲出のグラフである。

4. 何が違うのか!

まず、目につくのは、青磁の組成比が少ないことである。これは小野編年の第III期(16世紀後葉～IV期との境は天正の後半)遺物群に通常に見られるパターンで、形式はII期のものを継続しており、「II～III期の変化は容易にとらえ難く、およそ天文年間を通じて少しづつ漸移していく」という小野氏の指摘¹¹⁾の様にその過渡期たる様相を呈する。

青磁に関して両者を比較すれば、総量も器形のバラエティも小谷城の方が多く、僅かながら古相を示すものと考えられる。また無文碗に関しては両者ともに内弯(IV—c)のみで端反り(IV—b)がなく、天文年間で境に一線をもつ可能性がある。

白磁については、総量は観音寺城が圧倒する。各形式の出土パターンはほぼ同様であるが、小谷城で碗が1点、皿B群が1点観察される。いずれも小野第III期にはほとんど見られなくなるもので、小谷城の白磁組成の方が僅かに古相を示す。坏では見込み露胎圈をもつ小碗形態の一群が観音寺城にかなりの量が観察される。いずれも高台片で全形状の明らかなものは見られないが、おそらく口縁部片における外反形態が対応すると考えられ、一部綾花形態のものを含む可能性がある。小谷城の白磁皿F群に対して小野氏が指摘した意識的に貫入を出した暗灰褐色に発色する

一群⁹⁾は、観音寺城においてはC群の皿に多く見られる。

両者の皿の比率を染付皿のものと比較すると、その量が小谷城ではほぼ同量であるのに対し、観音寺城では白磁皿が圧倒している。この相違が時期差を示すものか、搬入パターンの違いを示すものかは把握し得ないが、青磁・白磁の時代から染付の時代へという中国陶磁の輸入の大流からすれば観音寺城の方が古相を呈することになる。しかし、白磁皿C群の形態は既に染付の端反り皿のそれとほぼ同形態であり、高台内に文字や印を染付する場合もあることから、この間に時期的な差を見い出すのは困難なことのようにも思われる。

次に染付であるが、まず両者とも染付碗のなかでも搬入の遡る一群と考えられる碗A群、B群が皆無であることが目をひく。また相違点として目につくのは、小谷城が碗、皿ともにいずれの文様分類ともある程度出土量をもっているのに対し、観音寺城ではC-I類など突出した分類が見られること、既述の観音寺城における皿の量がたいへん少なく、殊に皿E群は現段階では見られないこと、などがあげられる。これらは観音寺城における不明が32点あるように著者の分類能力の無さによるところが大きい。しかし、不明のうち碗と考えられるものが多く、然も不確定ながらC群、E群のものも多くある可能性が大きいことから状況は大略変化ないであろう。皿E群に関しては端反りの皿B群に対してやや新しい段階になると考えられ、小野編年ではIII期になってはじめて加わる一群とされている。この皿E群の有無が落城期5年の差を示すとは短慮の域を超えるものではないが今後、全国的レベルで検討されなければならない。

以上、比較しておこる現象を列挙した。小谷城ではほぼ50年間の城郭生命の間、徐々に中国陶磁をうけいれてきたことが平均化しているグラフラインから窺知される。これはこの間の浅井氏の安定した治世を示すものであろう。対して、観音寺城は幾度かの改修工事があるため出土遺物に対する信頼度は薄いものの、全容として小谷城の示す古相パターンが観音寺城に見られないことから、弘仁2年の改修以後ある種類（染付碗I類など）について一度期に搬入（調達？）している可能性があり、また白磁でカバーできる器種-皿については染付皿の搬入を控えていることなどが理解される。

5. 次へのプロローグ

本稿では、紙面の制約上、現象面の把握に終始した。この現象を表出させた背景にあるものを考えるには、県内の同時期における城郭関連遺物、殊に安土城などの資料を加えて検討しなければならない。さらには城郭のどの位置から出土したものかといった詳細な分析も必要となろう。

これらのやきものは、日用器としてであり、茶器としてであり、輸入という限られた量のなかで生死の時間を友にするものとして競って手に入れようとしたものであり、そこに人との深い繋がみえてくる。この時期、この城郭に留まることなく、輸入陶磁が語りかける人間の歴史を見たいがゆえにこれからもウロウロしなければならない。

注

(1) 湖北町教育委員会・小谷城址保勝会『史跡小谷城跡—浅井氏三代の城郭と城下町—』

- (2) 森岡栄一「羽柴於次秀勝について」(『市立長浜城歴史博物館年報』1 1987年)
- (3) 秋田裕毅「観音寺城」(『日本城郭体系 11 京都・滋賀・福井』新人物往来社 1980年)
- (4) 村田修三「城郭史上の観音寺城」(『観音寺城と佐々木六角氏 No.4』1981年)
- (5) 上田秀夫「14～16世紀の青磁碗の分類について」(『貿易陶磁研究No.2』日本貿易陶磁研究会 1982年)
- (6) 小野正敏「14～16世紀の染付碗、皿の分類と年代」(『貿易陶磁研究No.2』日本貿易陶磁研究会 1982年)
- (7) 小野正敏「出土陶器よりみた15、16世紀における画期の素描」(『MUSEUM No.416』東京国立博物館 1985年)
- (8) 前掲注(7)
- (9) 前掲注(1)

編集後記

本年度は協会設立20周年。これに伴う展示会や記念誌の発行等色々な事業を実施した。本号も20周年を祝う意味で、職員全員の投稿を呼びかけたところ、ほぼ全員の27名の参加を得、発刊することができた。紀要の充実はみんなの頑張りによるところが大で、次号以降も編集者を悩ませるほどの投稿を期待したい。

平成2年12月

紀 要 第 4 号

編集・発行 財団法人 滋賀県文化財保護協会
大津市瀬田南大萱町1732-2
Tel(0775)48-9780・9781

印 刷 宮川印刷株式会社
大津市富士見台3番18号
Tel(0775)33-1241